

抗菌薬適正使用の評価指標の探索および検証に関する研究

研究分担者 村木 優一 京都薬科大学 薬学部 臨床薬剤疫学分野 教授

研究要旨

感染対策向上加算を算定する医療機関を中心に薬剤耐性菌対策が進むなかで、診療所と高齢者施設での対策が課題となっている。診療所においては内服・外用抗菌薬の適正化が、高齢者施設においては水面下での薬剤耐性菌の拡がりに対する対策が求められている。本研究では、感染症診療の質の評価や新たな手法の探索および高齢者施設での適正使用推進のためのガイドの作成を目的とした。

耳鼻咽喉科を受診し、急性上気道炎と診断された患者では、複数の診断名の付与や検査の実施率が低いことが推察された。また、多剤耐性菌に罹患した患者における患者背景を調査したところ、投与状況を起点として感染契機を分類できる可能性が考えられた。さらに、高齢者施設を対象とした薬剤耐性菌対策ガイドの作成に着手した。本研究の成果は、診療所及び高齢者施設を対象とする効率的・効果的な薬剤耐性菌制御手法の確立に必要な知見の確立に対して有益な知見を与えるものと考ええる。

A. 研究目的

限られた医療資源のなかで効率の良い対策を立案するには、収集菌株の分子疫学的な解析や地域のアンチバイオグラム、抗菌薬使用状況の詳細なデータ分析といった基礎情報が欠かせない。

また、都道府県によって医療環境や社会的な背景が異なり、標準化と同時にそれぞれの特徴に応じた対策が必要となる。本研究班では基礎研究者と臨床の多職種連携によるデータに基づいた根拠のある効率的な薬剤耐性（AMR）対策を提言することを目的としている。

抗菌薬の使用と耐性には密接な関係があり、AMR対策において不適切な使用を避けることが必要である。こうした状況を評価するには、把握するためのサーベイランス体制の構築と得られた情報の利活用が必要である。これまでに我々は、全国や都道府県および二次医療圏における抗菌薬使用に関する状況を把握する体制を構築してきた。しかし、こうした抗菌薬使

用の状況を把握しても、感染症診療の質の評価や新たな手法の探索が必要であり、感染対策に関わる人々の育成も急務である。しかし、各医療機関における感染症診療の質の評価はこれまでに十分調査されておらず、薬剤耐性菌対策に焦点を当てたガイドはほとんどない。

そこで、本研究では、感染症診療の質の評価や新たな手法の探索および高齢者施設での適正使用推進のためのガイドの作成を目的とする。

B. 研究方法

1. 耳鼻咽喉科において急性上気道炎と診断された小児患者における診療の質の実態調査

耳鼻咽喉科において急性上気道炎と診断された小児患者に対して患者背景や受診回数、診断名、検査の実施状況ならびに処方薬の実態を調査した。

2. 多剤耐性菌感染症罹患患者における治療歴の調査

多剤耐性菌罹患患者の治療歴を把握するため、保険請求情報データベースを用いて、多剤耐性菌罹患患者の治療歴を調査した。

3. 高齢者施設における薬剤耐性菌対策ガイドの作成

薬剤耐性菌対策を行う上で今後課題となる高齢者施設の感染対策レベルの向上を目的とした高齢者施設における薬剤耐性菌対策ガイドの作成にあたり、「薬剤耐性誘導予防のための基本的な考え方」の項について素案を作成した。

（倫理面への配慮）

本研究は、直接的に医療機関における患者情報を取り扱うものではない。すなわち、データとしては、患者情報から切り離れた情報あるいは匿名加工情報のみを取り扱う。扱うデータは、匿名化を図り、団体および個人の不利益に十分配慮している。

C. 研究結果

1. 耳鼻咽喉科において急性上気道炎と診断された小児患者における診療の質の実態調査

2019 年から 2021 年において耳鼻科を受診した外来小児患者において急性上気道炎と診断された 8,010 人を対象とした。そのうち、急性上気道炎のみが診断されていた患者は 6.5% であり、他の患者は複数の傷病名が付けられていることが明らかとなり、検査実施率も低かった。

2. 多剤耐性菌感染症罹患患者における治療歴の調査

大規模請求情報を使用し、耐性菌感染症と診断された 1,027,582 人の患者から多剤耐性アシネトバクター罹患患者 96 名、多剤耐性緑膿

菌罹患患者 552 名を抽出し、投薬歴の有無で分類した。多剤耐性菌のリスク因子の有無について調査した結果、両者に大きな違いを認めた（公表前のため、詳細は示さず）。

3. 高齢者施設における薬剤耐性菌対策ガイドの作成

本ガイドの作成にあたり抗菌薬が必要となる場面や耐性菌を出さないためのポイントについて素案を作成し、研究代表者や分担者へ共有した。

D. 考察

本研究により、上気道炎と診断された患者における感染症診療の質ならびに多剤耐性菌罹患患者の治療歴から感染契機を区別できる可能性を検討し、高齢者施設における薬剤耐性菌対策を進める上でのガイド作成に着手できた。

ウイルスが原因とされる急性上気道炎と診断された患者には、抗菌薬は不要であり、適切な診断を行うためには検査の実施が必要である。本調査により急性上気道炎のみが診断される患者はほとんどおらず、複数の診断名が付与されていることから大規模保険請求情報を用いた分析を行う際、処方 of 適切性を判断する際には注意する必要性を明らかにできた。また、検査の実施率は低く、診療報酬など適切に検査を実施できる仕組みを構築する必要がある。

また、多剤耐性菌罹患患者においては、院内感染により発症する場合と抗菌薬の不適切な使用により耐性菌が出現し、罹患する場合が想定されるが、簡便に分類することはできない。今回、行っている大規模請求情報を用いた手法は今後、これらの課題を解決できる可能性が期待できる。

E. 結論

本研究で明らかにしたこれらの結果は、いずれも診療所及び高齢者施設を対象とする効率

的・効果的な薬剤耐性菌制御手法の確立に必要な知見の確立に対して有益な知見を与えるものとする。

なし

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) S. Ito, Y. Muraki, R. Inose, K. Mizuno, R. Goto, M. Kiyosuke, Y. Iinuma, T. Yagi, H. Ohge, Characteristics of pediatric patients claimed with acute upper respiratory infection during otorhinolaryngology consultations: A descriptive study of a large Japanese medical claims database. J Infect Chemother. . 2024 Jan 23:S1341-321X(24)00025-4.

2. 学会発表等

- 1) 福岡 千晴, 村木 優一, 後藤 良太, 水野香菜子, 冢瀬 諒, 大毛 宏喜, 大曲 貴夫. 大規模保険請求情報は多剤耐性緑膿菌感染症の感染契機を分類できるのか?. 第 71 回 日本化学療法学会西日本支部総会. 2023 年 11 月. 富山県富山市.
- 2) 上本 花南, 村木 優一, 後藤 良太, 福岡千晴, 水野 香菜子, 冢瀬 諒, 大毛 宏喜, 大曲 貴夫. 大規模保険請求情報は多剤耐性アシネトバクター感染症の感染契機を分類できるのか?. 第 33 回 日本医療薬学会年会. 2023 年 11 月. 宮城県仙台市.

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

